

氏名（本籍）	馬 雯雯
学位の種類	博士（国際日本研究）
学位記番号	博 甲 第 9759 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	ジェンダーに関わる現代日本語表現の研究—「女子力」を中心に—

主査	筑波大学 教授	博士（言語学）	小野 正樹
副査	筑波大学 准教授	Ph.D.（言語人類学）	井出 里咲子
副査	筑波大学 教授	博士（言語学）	沼田 善子

論文の要旨

本研究は、ジェンダーに関わる現代日本語語彙「女子力」を取り上げ、その表現の面および使用の面の特徴を明らかにするものである。日本語使用者へのアンケート調査および国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）のデータを用いて、「女子力」はどのようなものか、「女子力」はどのように使用され、評価されるのかを論じ、以下の4つの課題に取り組んでいる。

- 課題1： 接尾辞「力（りょく）」による派生語の全体の中で、「女子力」の位置づけおよび、「女子力」を巡る定義・解釈、意味分析を行う。
- 課題2： 「女子力」からの連想語、「女子力」を表す語から、「女子力」に関わる領域を設定し、「女子力」と「女性らしさ」との関連を明らかにする。
- 課題3： 「女子力」を使用する相手、対象となる事柄、具体的な表現、意図、受け取り方といった要素から、「女子力」の使用の様相を明らかにする。
- 課題4： 「女子力」に対する評価における語彙・表現から、「女子力」に対する評価の様相、「女子力」の捉え方の特徴を明らかにする。

各章の概要は以下の通りである。

第1章では、名詞「女子」と接尾辞「力（りょく）」の結び付きによってジェンダー表現となる「女子力」について、本語彙が定着する背景と、研究目的および研究課題を述べる。

第2章では、言語とジェンダー、語彙「女子」と「女子力」に関する先行研究を概観し、言語使用とジェンダー研究およびジェンダー表現研究という2つの流れ（中村 1995）に分け、先行研究と本研究の関連および本研究の位置づけを述べる。

第3章からは、本研究の分析結果を記している。課題1の「女子力」とは、どのようなものかという問いに対して、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用い、複合名詞「力」全体の中で「女子力」の位置づけを行

うべく、「力」を後項とする複合名詞の意味領域を大きく【ありか】【性質】【用途・目的・影響先】【その他】に分けた上で、「女子力」を【ありか】に位置づける。【ありか】に位置づけられた「女子力」の前接語はその力の持ち主を顕在化させ、前接語からその力の持ち主は誰かということが解釈でき、「女子力」の形成、広がり、定着において社会的要因と関わることを明らかにする。「女子力」は「女性らしさ」を構築する動的なプロセスを可視化し、「doing gender (ジェンダーする)」という行為を表し、「女性らしさ」のありかを示していること、「女子力」は能力として捉えられ、評価されることを述べる。また、その能力の内容から、「女子力」には伝統的なジェンダー規範を維持、構築する側面があることを明らかにし、所持物や行為に具現化された「女子力」は、受け取る側にとって「好ましい」ものや事態として捉えられるということを授受(補助)動詞の分析から述べる。

第4章は、課題2の「女子力」とはどのようなものかという問いに着目する。「女子力」からの連想語および「女子力」を表す語に焦点を当て、「女子力」に関わる【個人：性格・外見・様子】【家庭：家事・料理】【社会：人や物事に対する気配り・態度】という三領域を設定することで、「女子力」と「女性らしさ」との関連を明らかにし、「女子力」から連想される語、「女子力」を表す語から形容詞を取り出して、それらを中立的な語感を持つ「女性」との形容詞のコロケーションを比較することで、「女子力」の特徴を明らかにする。

第5章では、課題3の「女子力」はどのように使われるのか、評価されるのかという問いに対して、「女子力」の使用の様相の分析結果を示し、「女子力」が、「ほめ」の効果のある表現として使われることが、話者と聴者の両者から観察できることを述べる。その一方で「女子力」が「からかい」「忠告」「批判」の効果のある表現か否かについては、女性が聴者である場合に否定的な受けとめも観察され、必ずしも肯定的にだけ受けとめられるのではなく、「揺らぎ」があることが示される。また、「女子力が高いね」に対して聴者の「応答」の分析結果から、具体的な「応答」表現には「肯定」「疑問」「否定」を表す表現が観察される。「女子力が高いね」という指摘に対し、男性はジェンダー・アイデンティティを主張し、「女子力」はジェンダーの境界線を越え、男性が境界線から距離を置くことも述べる。

第6章は、課題4に対して、アプレイザル理論 (Appraisal theory) における attitude (態度評価) を分析の枠組みとして用いて考察する。ここでは、「女子力」を巡る評価表現に着目し、大学生・大学院生 (女性・男性) に「女子力」がどのように評価されるのかを分析した上で、「女子力」の捉え方の特徴を示す。「女子力」ということばを巡る評価には、肯定的な態度を示す語彙・表現もあるが、否定的な態度を示す語彙・表現も見られることから、両面の態度を示す表現が「女子力」の二面性を示していると結論づける。

第7章では、本研究の4つの課題に対する分析結果をまとめ、「言語とジェンダー研究」「語彙の研究」「ジェンダー表現への理解」「社会的な意義」という面から、本研究の意義を述べる。また、接尾辞「力」についての日中対照研究、ジェンダーに関わる新しい表現の体系的な研究、アプレイザル理論 (Appraisal theory) の修正発展の可能性について、今後の研究の展望を述べる。

審査の要旨

1 批評

現代日本語の「女子力」という「女子」と「力」からなる複合語をとりあげ、言語研究のみならず、社会学研究にも踏み込んだ新たな切り込み方法で論じた論文構成となっている。「女子力」を派生語「力(りょく)」と共起する語彙全般の中での明確な位置づけができています。その上で、語彙研究として語構成、コロケーション、社会言語学的な使用の定着、語用論研究的な話者と聴者による語彙の評価など、複合的な内容

で、さらに社会的意味の観点から、【個人】【家庭】【社会】という三領域との関わりの記述に挑んでいる。分析内容は、コーパス、実験調査において緻密で、一貫性が認められ、新たな言語研究の視点が開拓できている。アプレイザル理論を用いた分析も、この理論自体の発展が期待できる用い方となっており、論文の言語レベルだけではない、社会における実証化を目指した方向性に合致している。

本研究の言語学的意義は、静的・動的の両面から複合的に考察し、新たな研究の方法を明確に提示し、その可能性を開いて見せた点にある。静的な面から、先行研究を十全に踏まえ、「女子力」の使用実態や使用状況の変化の記述だけでなく、言語使用の動態を「誰が、誰に対して、どのような意識で使用し、それがどのように聞き手に受けとめられるか」という談話研究のエッセンスを盛り込むことで、動的に捉え直す。加えて、「女子力」に関する言及への聞き手の反応を「肯定」「疑問」「否定」の隣接ペアから分析する新しい手法を提示する。これにより、ジェンダー研究に対する言語学的アプローチの重要性、可能性を見事に引き出して見せている。

データ分析についても、本論で言う「揺らぎ」が、女子力の変化や個人的、あるいは性差的な評価の多様性にあることを忠実に述べている点など、データに真摯に向き合っている姿勢も高く評価できる。また、語彙を通じて、現代日本社会の実態を切り取っている手法は、学位（国際日本研究）を深化させ、社会への提言的な研究となっている。

ただし、本研究の調査対象の年齢が20代に限られていることはアンケート調査の限界で分析が対人関係に限られており、未解決な点がある。また、【個人】【家庭】【社会】という三領域を設定した根拠もまだ曖昧さがあるが、しかし、これらの多くは、本研究によって明らかになった課題であり、本研究の成果と捉え直すこともできるもので、今後の発展的研究で解決されていくべきもので、なんら本論文の学術的価値を損なうものではない。

2 最終試験

令和3年1月25日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審査の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（国際日本研究）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。